

林業統計研究会の活動記録

内 藤 健 司*

(1) はじめに

1988年10月にニュージーランドのロトルアで林業統計研究会とニュージーランド林業試験場の合同シンポジウムが企画されている。シンポジウムのイントロで石田正次先生が林業統計研究会の研究活動についてその概要を報告する予定であったが、石田先生の参加が急に取り止めとなりそのお鉢が私の所に回ってきた。林業統計研究会が発足して以来既に20余年の歳月が過ぎ去り、その間石田先生や木梨先生が本会の歩みについて研究会誌に投稿されている。しかし調べてみると本会の長い歴史の中には活動記録のはっきりしない時期もあり、時間の経過につれそれらの記憶はだんだんうすれていくと思われる。そこで現時点までの活動記録を整理し文末年表として記録に留めると共に不明な点や間違っている点について会員諸氏の御指摘・会誌への御投稿をいただき、より正確な記録ができれば幸いな事と思う。

(2) 本会発足当初における活動目的と組織構成

石田正次先生や高田和彦先生の林業統計研究会誌の記録によると、昭和40年以前から在京の西沢正久、平田種男、鈴木太七、大友栄松先生らが林業統計に関する研究会の例会を定期的に開催していたが、高田先生が統計数理研究所に内地留学されたのをきっかけとし林知己夫、石田正次先生らの発起により林学(測樹学)と統計学に関心をもつ者が集まり、前述の研究会を包含する形で研究会を始めた(1965.8)のが本会の起源である。発会式の折「本会は林学・林業における統計利用の発展と普及をはかるために各研究者間の連絡を図り、利用者にたいする援助を行なうことを目的とする」と決議された。木梨謙吉先生によれば当時の時代背景として、ビッターリッヒ法、全国森林資源調査(全国3,000点プロット, 10,000点プロット)、地位指数推定などにみられる統計的手法(標本調査論, 数量化理論)や当時普及しつつあった大型電子計算機の林業への応用といった機運の盛り上がりがあったようである。従ってその当時のメンバーには依田和夫氏などの林野庁関係の人や民間団体・林業試験場・大学関係者がおり、立木位置図の作成やビッターリッヒ法による資源調査など活発な野外調査を一緒に行っていた。会の運営については林知己夫先生を会長、石田正次先生を幹事長とし統計数理研究所に事務局を置くなど、会員数の割りにしてはかなり統計数理研究所(石田先生や駒沢先生)に負担をかけていたようである。私も卒業の前後

*宇都宮大学農学部

(1968年前後)、平田種男先生か中島巖先生の代わりで統計数理研究所での会合に出席した記憶がある。さらに大学院のころ、科研費(未開発天然林の調査と評価法)による野外調査の補助でよく山に入りお酒も飲ませてもらった。その折全国各地から集められた有名な諸先生のお顔や人柄を知ることができたし、助っ人としてきていた当時学生竹内公男氏、上野洋二郎氏、高橋文敏氏らとも知り合えた。

その後、林地生産力(数量化計算)、天然林施業、空中写真の森林調査への利用、林分生長の数学モデルなどのテーマで研究活動が行なわれ、共同調査も北海道から九州にまで及んで研究活動は活発な盛り上がりを見せていたが、折からの全国的な大学紛争の時期を境として(必ずしも大学紛争がその原因となったというわけではなく、たまたま時期的に一致したのかもしれないが)研究活動は下降期に入ったようである。年表からも明らかなように会発足以来年2回の割りで定期的に開催されてきたシンポジウムは、第14回(1973)シンポジウム以降第18回(1977)シンポジウムまで年1回しか開催されていない。第11回(1971)シンポジウム報告(坂本格先生)によれば、「特定の研究を媒体として結ばれた会員中心の運営方法に若干の疑問が投げ掛けられ曲がり角にさしかかっていた」ようである。その後、第14回(1973)シンポジウム(北大)の後で低調化した研究活動活性化のためのアンケート調査が行なわれたが、その集計結果は年表を参照されたし。そのような状態の中でも第15回(1974)シンポジウムでは森林の公益的機能、第16回(1975)シンポジウムではグロスモデルの問題がシンポジウムの主要テーマとして取り上げられていた。また何時の頃か記憶が定かではないが(本会発足10年という事が一つのきっかけだったかもしれない)、駒沢先生より本会事務局を統計数理研究所から林学サイドへ移してほしいとの申し出があり、林会長・石田幹事長は留任のまま事務局が東京大学か新潟大学へ移された。この間の事情は高田先生か南雲先生、石田先生、駒沢先生が詳しくご存じのはずである。

(3) 発足10年後の節目——林業統計研究会誌の創刊——

1976年は林業統計研究会発足後10年経過した年であるが、一つの大きな節目となった年でもある。本会会員に対するアンケート調査(1973)の集計結果にもとづき研究会誌が創刊されるとともに、若手研究者に対して本会研究活動の主体性が迫られた年でもある。林業統計研究会誌創刊号(1976)に掲載された運営委員会報告によれば、会発足後10年経過に際し「強力な若手による運営委員会を発足させ、今後の会の在り方、運営の方法等を検討する」事になり、高田先生が企画運営委員長に就任された。その結果、第16回(1975)シンポジウム・テーマの生長モデルを引き継いで、第17回(1976)から第20回(1979)シンポジウムまで森林の生長モデルを中心とした自称・他称の若手研究者が弁士として次々とかりだされる事となった。言わば林業統計研究会第2世代の育成期であった。第21回(1980)シンポジウムテーマは森林の多面的機能評価と管理であったが、第22回(1981)から第26回(1984)シンポジウムまでは森林調査体系、ワイブル分布、データベース、樹幹形といった測定・生長論関係のテーマが主として続いた。

会発足当初恒例だった夏期の集まりもそれまでとは違った雰囲気ではあるが、1978年(筑波大八ヶ岳演習林)、1980年(信大野辺山農場)とぼちぼち再開され1982年(宇大日光演習林)以後は恒例となり、沈滞気味であった夏期研究活動も徐々に回復の様子を見せ始めた。特に1983年(新大佐渡演習林)、1984年(東大農学部)の夏期シンポジウムでは京都での第17回ユフロ世界大会の影響か1984年の東京でのユフロ国際研究集会を意識してか、世界の森林資源とか世界各国の林業経営といった問題に会員の目が向き始めた。この事は日本の木材消費が外材に大きく依存するようになった事と無縁ではない。

(4) 林業統計研究会 2度目の転機——海外研究交流——

1984年は林業統計研究会にとって2度目の節目となる年であった。発足以来の会長であった林先生に代わってあらたに高田先生が会長に就任し、南雲副会長、小林運営委員長、西川事務局長、木平編集委員長という新体制が確立された。発足以来統計数理研究所に多大の負担をかけてきた本会が名実ともに独り立ちをしたわけである。さらに同年10月東京でのユフロ国際研究集会の開催は多少大げさな表現になるが本会組織をあげての大事業であった。海外研究者との研究交流は大きな成果であったが、林野庁、日本林業技術協会、森林経理研究会、日本林学会等の協力のもとに林業統計研究会のメンバーが一致協力して一つの事業を成し遂げたという自信は何物にも換えがたいものであり、その後の本会活動の原動力となったといえよう。またこれらの事は林業統計研究会第2世代育成効果の総決算とも言えよう。

第27回(1985)以後の春のシンポジウムでは、第28回(1986)のビッターリッヒ法を除けば第30回(1988)まで主として広葉樹天然林の施業と計画、森林の多目的利用と社会的合意形成といったテーマが取り上げられている。その一方林業統計研究会第3世代育成という意味も含めて、夏のシンポジウムでは自称・他称の若手研究者が弁士としてかりだされ自由な発言のチャンスが与えられている。それらの講演テーマはそれまで続いてきた生長モデルに関する物が多いが、1987年夏期シンポジウム(山形県羽黒町)ではリモートセンシングが取り上げられた。

1987年6月には小林、西川先生をはじめ事務局のそれまでの努力が実り、本会が「広報協力学術団体」として日本学術会議に登録されいわゆる学会としての形式も整った。会員数も木平先生らの勧誘努力で200余名に増加し、空間的には北海道・九州・沖縄を越えて海外まで、年齢的には林業統計研究会第1世代から第3世代までの広がりを見せている。

(5) おわりに——林業統計研究会の将来——

本会会員の現在の研究分野は木平先生が「加入ご案内」(1988)で詳しく説明しているとおり広範な分野に及び、シンポジウムの際にはメインテーマを設定するものの会員個人の研究は自由に行なわれている。従って本会活動の将来を特定の個人が決定できるはずがなく、個々の会員の主体的活動が将来を決定する。それぞれの会員が本会をとおして意を同じくする人たちと様々なブ

プロジェクトを多重的に組んでいく中からその将来像は決定されるであろう。しかし敢てその将来を抽象的に言うならば、多面的機能をもった森林資源を有効利用していくに際し、グローバルな観点も含めて、森林資源の調査・集計・分析・需給予測・施業管理計画作成等に関する方法論、技術論あるいは哲学論が研究の中心となるであろう。その際注意しなければならないことはニュージーランドの経験が示すように、基礎的・理論的研究が重要である事は当然としても研究者が身内で自己満足的にその成果をたらい回しするのではなく、研究成果を実際の現場の人に理解し使い易い形でコミュニケーションする必要があるであろう。1984年の森林経営に関する国際研究集会のサブテーマ「研究と実践(RESEARCH AND PRACTICE)」はまさにこのことを意味していた。さらに森林施業を考えるに際し造林・保育から林産物の収穫・加工・利用販売までのルーチンを総体的に捉える必要があり、異なる研究分野との共同プロジェクトは今後不可欠の物となろう。

以上大雑把に本会の活動記録を整理してみたが、私自身発足当初からいたわけではなく最近10数年の事しか知らない。しかし学会誌等に記録されていたシンポジウム報告等をたよりになんとか整理してみたが、改めて「記録」の有り難さを再認識させられた。今後も春夏のシンポジウム報告や総会における年次活動報告は、学会誌または林業統計研究会誌上に記録してほしいものである。最後になったが、新潟大学の高田和彦、竹内公男先生には過去の資料について貴重な御教示を頂いた。記して厚く感謝する所である。

参考文献(発表年度順)

- 1966.7 大隅真一：第1回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 48(7), 298-302
1967.6 林業統計研究会：第2回シンポジウム報告(配布資料)
1967.6 林業統計研究会：第3回シンポジウム報告(配布資料)
1967.7 西沢正久：(第3回)林業統計研究会シンポジウム。日林誌 49(6), 258-263
1967.8 木梨謙吉：林業統計の動きとその問題点。日林誌 49(8), 343-347
1968.1 堀田雄次：(第4回)林業統計研究会シンポジウム。日林誌 50(1), 24-27
1968.8 南雲秀次郎：第5回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 50(8), 254-257
1969.2 小林正吾：第6回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 51(2), 41-45
1969.7 西川匡英：第7回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 51(7), 201-204
1970.12 長 正道：第8回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 52(12), 369-373
1971.4 大貫仁人：第9回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 53(4), 119-124
1972.4 坂本 格：第11回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 54(4), 137-140
1972.7 真辺 昭：第10回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 54(7), 244-248
? : 第12回林業統計研究会シンポジウム(於ける名大)が不明。
1973.5 北村昌美：第13回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 55(5), 185-188
1974.1 阿部信行：第14回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 56(1), 25-29
1974.12 高橋文敏ら：第15回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 56(12), 448-451
1976.1 石田正次：林業統計研究会の10年。林統研誌 1, 3-12
1976.1 石田正次ら：(第16回シンポジウム報告)。林統研誌 1, 13-45

- 1976.11 高橋文敏・内藤健司：第17回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 58(11), 424-428
- 1977.8 高田和彦：第18回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 59(8), 305-307
- 1978.9 竹内公男：第19回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 60(9), 349-352
- 1979.2 木梨謙吉：林業統計研究会の歩みと将来。林統研誌 4, 1-6
- 1980.2 小林正吾・長 正道：(第20回シンポジウム報告)。林統研誌 5, 1-21
- 1981.2 菅原 聡：(第21回シンポジウム報告)。林統研誌 6, 4-6
- 1981.3 大貫仁人：ランドサットデータの林業の利用——現状と将来。林業技術, No.468, 11-16
- 1982.2 箕輪光博：(第22回シンポジウム報告)。林統研誌 7, 13-27
- 1982.10 田中和博：第23回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 64(10), 402-404
- 1983.8 松村直人・山本充男：1982年度林業統計研究会夏期セミナー。日林誌 65(8), 305-307
? (第24回林業統計研究会シンポジウムは1982年度夏期セミナーの事)
- 1983.11 白石則彦：第25回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 65(11), 437-439
- 1984.7 粟屋善雄：1983年度林業統計研究会夏期セミナー。日林誌 66(7), 289-292
- 1984.12 伊藤達夫：第26回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 66(12), 516-520
- 1985.2 内藤健司：林業統計研究会とビットリッヒ法。林統研誌 10, 53-55
- 1985.2 南雲秀次郎ら：森林経営に関するユフロ国際研究集会報告。林統研誌 10, 95-125
- 1985.4 露木 聡：1984年度林業統計研究会夏期セミナー。日林誌 67(4), 157-159
- 1985.10 野堀嘉裕・安部信行：第27回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 67(10), 421-425
- 1986.4 山本雅博・吉本敦：1985年度林業統計研究会夏期セミナー。日林誌 68(4), 165-168
- 1986.11 須田俊雄：第28回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 68(11), 478-481
- 1987.1 石橋整司：1986年度林業統計研究会夏期セミナー。日林誌 69(1), 37-39
- 1987.11 増谷利博：第29回林業統計研究会シンポジウム。日林誌 69(11), 453-456
- 1988.2 今田盛生ら：第30回シンポジウム資料。林統研誌 13, 128-141
- 1988.2 高田和彦：西沢先生の思い出。林統研誌 13, 142-143
- 1988.2 高橋教夫：昭和62年度夏期シンポジウムの報告。林統研誌 13, 147-148
- 1988.2 西川匡英：日本学術会議「広報協力学術団体」指定への経過。林統研誌 13, 149-150
- 1988.3 木平勇吉：林業統計研究会への加入ご案内。Jour. PC Forestry 6(1), 25-27
- 1988.6 南雲秀次郎ら：林業統計研究会・森林経理研究会合同シンポジウム。会報 315, 2-12

年表：林業統計研究会研究活動の記録

- 1965.8 東京目黒の国立林試にて林業統計研究会が発足する。初年度会員数100余名。
 英文名をJAPAN ASSOCIATION FOR FORESTRY STATISTICS (JAFS)とする。
 講演者及び演題
 林知己夫：林学に用いられる統計的手法。
 木梨謙吉：統計的手法の林学における応用。
- 1965.8-1966.4 毎月第一金曜日定期的に研究会を開催する。
 講演者及び演題
 高田和彦：モンテカルロ法によるビットリッヒ法の吟味
 西沢正久：アングルサンメーション法について

依田和夫：森林資源調査の企画について
西沢正久：シルバースコープについて
石田正次：佐渡における野兎の調査について

1966.4 第1回林業統計研究会シンポジウム(京都府立大)

主題：Bitterlich 法に関する研究

講演者及び演題

大友栄松：定角測定法の考え方などについて
高田和彦：電子計算機によるビッターリッヒ法のシミュレーション
北村昌美：一致高和について
西沢正久：角度測定法の応用について
石田正次：統計理論からみたビッターリッヒ法の問題点

1966.8 林業統計講習会開催(統計数理研究所にて参加者 89 名)。

講演者及び演題

林知己夫：林業統計について
石田正次：林業統計の基礎
林知己夫：調査法理論
林知己夫：多次元解析と数量化
駒沢 勉：数量化の計算法
西沢正久：数量化の応用
中島 巖：航空写真の統計的利用
大友栄松：プロットレスサンプリング
石田正次：経済統計について
高田和彦：電子計算機によるシミュレーション
鈴木太七：林業におけるオペレーションズリサーチ

1966.9 第2回林業統計研究会シンポジウム(秩父武甲荘)

主題：森林資源調査について

講演者及び演題

依田和夫：森林調査について
近藤正巳：林業における実験計画適用についての問題点
鈴木太七：確率過程としての林分の遷移

1967.4 第3回林業統計研究会シンポジウム(東京営林局)

講演者及び演題

中島 巖：航空写真の自動判読について
林知己夫：動く母集団の大きさ決定の問題——野兎について——
木梨謙吉：林業統計の動きとその問題点

- 1967.8 第4回林業統計研究会シンポジウム(新大佐渡演習林, 以後家族同伴が慣行となる)
主題: 林地生産力の把え方
講演者及び演題
小林正吾: 林地生産力とその推定法
山田昌一: 地形解析に基づく森林生産力
依田和夫: 森林生産力と林業経営
平田種男: 森林生産力のつかみ方
- 1968.2 「新しい林業統計」を出版。(林業統計研究会: 黒岩菊郎編)
- 1968.4 第5回林業統計研究会シンポジウム(名大)
主題: 密度管理について
講演者及び演題
篠崎吉郎: 植栽密度効果の Logistic 理論
安藤 貴: 林分密度管理図と密度管理
堀田雄次: 収穫表と密度管理
- 1968-1969 文部省科学研究費による林業統計研究会共同研究。
「未開発林の調査と評価方法に関する総合研究」研究代表者: 近藤正巳
- 1968.8 第6回林業統計研究会シンポジウム(北海道庁)
主題: 天然林の施業(1)
講演者及び演題
武居 猛: 天然林の生長と枯損
前崎武人: 天然林の生長とその調査法
南雲秀次郎: 線型計画による収穫予定法
- 1969.4 第7回林業統計研究会シンポジウム(東京農大)
主題: 天然林の施業(2)
講演者及び演題
丸山幸平: ブナ天然林の相対生長について
菊池捷治郎: ブナ天然林の施業について
高田和彦・小林正吾・阿部信行: チミケップにおける調査について
- 1969.8 第8回林業統計研究会シンポジウム(宮崎県九重)
主題: 天然林の調査法をめぐって
講演者及び演題
竹下敬司: 林地生産力の推定とその普遍性
中島 巖: トムラウシ調査を中心として
木梨謙吉: えびの調査を中心として

- 1970.8 第9回林業統計研究会シンポジウム(京大)
主題：林業におけるコンピュータリゼイション
講演者及び演題
高田和彦：コンピュータが林学にどのように役立つか
油津雄夫：林業への電子計算機の導入
川端幸蔵：農林省林業試験場における電算機利用について
- 1971.4 第10回林業統計研究会シンポジウム(統計数理研究所)
主題：林分生長の数学モデル
講演者及び演題
鈴木太七：林業における遷移確率の応用について
梅村武夫：林分遷移方程式の数値解法
石田正次：イギリスの森林
- 1971.8 第11回林業統計研究会シンポジウム(高知県桂浜)
講演者及び演題
林知己夫：多次元的関連分析の一方法——数量分類のある方法——
岩神正朗：ザイモグラフィの林学への応用
都築和夫：魚梁瀬地方のスギ天然林の稚樹の発生と消長について
- 1972.4 第12回林業統計研究会シンポジウム(名大)
主題：ロジスチック理論の基礎と密度効果——その周辺——
講演者及び演題
篠崎吉郎：ロジスチック理論の基礎と密度効果——その周辺——
- 1972.7 第13回林業統計研究会シンポジウム(山形県羽黒町)
講演者及び演題
北村昌美・本間正勝：スギ雪害の研究
芳賀正雄：森林の多目的利用について
Michael Prodan：森林の社会的機能と環境問題
- 1973.4 北村昌美会員を林学賞に推薦，受賞。
- 1973.8 第14回林業統計研究会シンポジウム(北大)
主題：北海道カラマツ林施業の二・三の問題
講演者及び演題
小林正吾：カラマツ育林環境の地域性
真辺 昭：カラマツの生産予測
柿原道喜：カラマツの伐期齡

1973.10 研究活動活性化にむけアンケート調査。要望の集計結果は以下のとおり。

- 1) 研究会誌の発行
- 2) up to date な研究論文の速報
- 3) 低調化している研究会活動の復活
- 4) 関連論文のアブストラクト作り
- 5) 隣接研究分野との共同シンポジウムの開催
- 6) 会員間の共同研究の活発化
- 7) 外国との共同研究

1974.4 中島巖会員を林学賞に推薦，受賞。

1974.4 第15回林業統計研究会シンポジウム(東大)

主題：森林の公益的機能

講演者及び演題

西沢正久：森林の公益的機能を考慮にいれた最適森林計画

熊崎 実：森林資源利用と環境問題——その経済分析——

1975.4 第16回林業統計研究会シンポジウム(九大)

主題：Growth Model について

講演者及び演題

石田正次：森林生長モデルとコンピュータ・シミュレーション

鈴木太七：林分遷移の方程式について

高田和彦：生長モデル

1976.1 林業統計研究会誌 (Journal of the JAFS) 創刊される。

1976.4 第17回林業統計研究会シンポジウム(東大)

主題：森林のモデル

講演者及び演題

林知己夫：モデルによる分析について

竹内公男：固定試験地とモデル

森田栄一：人工林間伐モデル

相場芳憲：密度効果を基にした林分生長の予測

西川匡英：天然林の生長モデル

今田盛生：ミズナラ構造用材生産林の一作業級としての林木蓄積・年生長量・年収穫量

斎藤昌宏：モデルと Biological な側面

竹下敬司：森林立地とモデル

仁木直人：現象のモデル化

末田達彦：数学モデルの機能

北村昌美：ドイツの林業

1977.4 第18回林業統計研究会シンポジウム(京都比叡山)

主題：生長の理論とその応用

講演者及び演題

阿部信行：トドマツ人工林の生長モデル

箕輪光博：天然林の直径分布について

木平勇吉：保続計算に生気を与えよ

白井 彰：森林モデルの利用方法について

磯 和幸：生長の理論とその応用

林知己夫：類型化と多次元尺度解析

1978.4 第19回林業統計研究会シンポジウム(東京農大)

主題：森林経営計画の方法

講演者及び演題

天野正博：国有林の施業計画について

梅山利一：風致的森林施業と問題点

大貫仁人：森林情報の収集・処理・解析手法について

内藤健司：密度管理図に関する疑問

広田文憲：気象害と施業

前田 満：北海道における保護技術と森林施業法の問題点

1978.7 1978年度夏期シンポジウム(筑波大八ヶ岳演習林)

講演者及び演題

石田正次・仁木直人：コンピュータ講座

梅村武夫・末田達彦：カナダにおける森林調査

木平勇吉：ルーマニアにおけるユフロ分科会の報告

内藤健司：カラマツ密度試験地の紹介

1979.4 第20回林業統計研究会シンポジウム(東大)

主題：森林測定の諸問題

講演者及び演題

小林正吾：森林の生長モデルについて

長 正道：空中写真による森林調査について

南雲秀次郎：(測樹学教育について?)

林知己夫：森林に対する住民の態度

1980.4 第21回林業統計研究会シンポジウム(筑波国立林試)

主題：森林の多面的機能の評価と管理の在り方について

講演者及び演題

菅原 聡：森林の価値評価について
竹下敬司：林地生産力の推定とその普遍性
西沢正久：森林調査体系の現状と将来

1980.7 1980 年度夏期シンポジウム (信大八ヶ岳農場)

講演者及び演題 (勲章受賞記念講演)

林知己夫：統計学と数理化理論について

1981.4 第 22 回林業統計研究会シンポジウム (名大)

主題：これからの森林調査体系について

講演者及び演題

箕輪光博：ニュージーランドの森林計画システム

天野正博：日本における森林資源調査法——カナダとの比較——

大貫仁人：ランドサットデータの林業的利用——現状と将来

1982.4 第 23 回林業統計研究会シンポジウム (日大藤沢校舎)

主題：生長モデルとしてのワイブル分布の応用

講演者及び演題

箕輪光博：生長モデルとしてのワイブル分布について

阿部信行：森林施業におけるワイブル分布の利用例

柿原道喜：ワイブル分布とその応用

1982.7 第 24 回林業統計研究会シンポジウム (宇大日光演習林)

主題：試験林資料のデータベースについて

講演者及び演題

天野正博：データ管理プログラムについて

田中和博：情報検索用のデータベース

1983.4 第 25 回林業統計研究会シンポジウム (岩大)

主題：森林調査データの処理、分析におけるコンピュータの利用現状と将来について

参加者全員による総合討論

1983.7 1983 年度夏期シンポジウム (新大佐渡演習林)

主題：世界の森林資源

講演者及び演題

中島 巖：世界の森林資源について

松本光朗：カナダの森林資源

天野正博：アメリカの森林資源

木平勇吉：アメリカの森林資源

箕輪光博：オーストラリアの森林資源

南雲秀次郎：スウェーデンとフィンランドの森林資源
末田達彦：中国，インド，ネパールの森林資源
吉本 敦：タイの森林資源
松村直人：インドネシア，マレーシア，フィリピンの森林資源
竹内公男：韓国の森林資源
末田達彦：南極越冬記

1984.4 第26回林業統計研究会シンポジウム(東大)

主題：樹木の幹形の形成とその表示法——研究の現状と展望——

講演者及び演題

梶原幹弘：幹材積推定における相対幹形の効用

長嶋 郁：樹幹形の表現

増谷利博：スギ相対幹形に関する二・三の検討

1984.4 高田和彦氏2代目会長就任。林知己夫，黒岩菊郎，近藤正巳氏らを名誉会員に推薦
事務局を新潟大学より筑波の林業試験場へ移動。

1984.7 1984年度夏期シンポジウム(東大)

主題：世界各国の林業経営について

講演者及び演題

木平勇吉：イギリスの林業経営

箕輪光博：ニュージーランドの林業経営

天野正博：スウェーデンとカナダの林業経営

1984.10 IUFRO 国際研究集会開催。(東大)

1985.4 第27回林業統計研究会シンポジウム(北大)

主題：北海道における有用広葉樹の生長予測と施業技術

講演者及び演題

菊沢喜八郎：収量-密度関の理論と応用

菅野高穂：北海道における広葉樹2次林の萌芽更新と施業

猪瀬光雄：ウダイカンバの生長予測

野上啓一郎：北海道演習林における広葉樹2次林の生長量と施業技術

1985.7 1985年度夏期シンポジウム(名大稲武演習林)

主題：生長論とその周辺

講演者及び演題

田中和博：直径分散の増加と拡散モデル——基本的な4つのモデル——

野堀嘉裕：北方天然林の現状と林相改良

吉本 敦：生長方程式と生長曲線式の分類

伊藤達夫：Richards 生長関数に基づく同齡単純林の胸高断面積合計と平均胸高断面積の生長モデル

松本光朗：広葉樹資源量推定について。ローレンツ曲線による広葉樹林分構造の表現
森田栄一：同齡單純林における新しい蓄積推定法

1986.2 林業統計研究会誌 11 号より学会誌化へむけ論文の審査制度を設ける。

1986.4 第 28 回林業統計研究会シンポジウム (宇大)

主題：ピッターリッヒ法の過去、現在、未来

講演者及び演題

高田和彦：日本におけるピッターリッヒ法導入期における研究

上野洋二郎：定角測定法による林分材積推定について

箕輪光博：レラスコープの世界——経験、直観、論理——

1986.7 1986 年度夏期シンポジウム (東大千葉演習林)

主題：生長論とその周辺 (II)

講演者及び演題

山本博一：直径生長に対する間伐の影響について——Mitscherlich 式を用いた比較——

白石則彦：Gompertz 関数をもとにした人工林の間伐モデル

堀田雄次：林分の疎密と生長——Richards 関数による解析——

1987.4 第 29 回林業統計研究会シンポジウム (九大)

主題：九州・沖縄における広葉樹林の諸問題

講演者及び演題

平田永二・新本光孝：沖縄本島北部における天然生常緑広葉樹林の林分構造の特性

甲斐重貴：南九州における広葉樹林とその施業の現状

七里成徳：広葉樹資源調査における空中写真の意義

1987.4 事務局を林業試験場より名古屋大学へ移動。梅村事務局長，末田編集委員長

1987.6 「広報協力学術団体」として日本学会会議に登録される。本会会員 200 余名。

1987.7 1987 年度夏期シンポジウム (山形県羽黒町)

主題：リモートセンシングと森林施業

講演者及び演題

粟谷善雄：ランドサットによる伐採照査

露木 聡：パソコンによるリモセン・データ処理システム——FREDAM——

妹尾俊夫：リモセン・データによる森林管理のためのデータベースの作成とその応用

木平勇吉：GIS (森林施業のための地理情報)

野堀嘉裕：軟 X 線写真による樹木の年輪解析

大友栄松：学術用語について——生長か成長か——

1988.4 第30回林業統計研究会シンポジウム(新大)

主題：これからの森林計画を考える

講演者及び演題

南雲秀次郎：森林計画制度を考える

木平勇吉：ポートフォリオ型の森林計画

今田盛生：事業区の適切な設定とその計画過程の分化

1988.4 南雲秀次郎氏3代目会長就任。

1988.7 1988年度夏期シンポジウム(京都府立大大野演習林)

主題：Richards生長関数とその周辺

講演者及び演題

大隅真一：Richards生長関数の応用のために

梅村武夫：修正Richards生長関数について

内藤健司：Richards関数の極限形。Gompertz関数との関係

伊藤達夫：Richards生長関数のパラメータの推定

1988.10 林業統計研究会・ニュージーランド林業試験場合同シンポジウム開催。(ロトルア)